令和３年度　学力向上総合推進事業＜高校外国語＞

授業力向上推進プロジェクト委員会

所属：　岐阜県立長良高等学校
氏名：　市橋憲和

１　個人テーマ：①観点別学習状況の評価を踏まえた「読むこと」のテストの工夫と改善
②新科目「論理・表現Ⅰ」における指導と評価の年間計画について

２　テーマ設定の理由：

来年度から高等学校で新学習指導要領が施行され、新たに整理された３観点での観点別学習状況の評価が始まる。これまで自分が行っていた「読むこと」のテストが、観点別学習状況を正しく評価できるテストなのか、「読むこと」のペーパーテストを再考し、工夫と改善をするためにテーマ①を設定した。

また、来年度新科目として「論理・表現Ⅰ」が設定された。４月からのスタートに向けて、この科目の目標や評価の観点の趣旨は何かを理解する必要がある。それらを踏まえ指導と評価につなげていくためにテーマ②を設定した。

３　研究内容（取組内容）：

①適切なテストとはどのようなものか、観点別評価である「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」は何かを理解し、それらを測る「読むこと」のテストの作成を行った。

②来年度採用予定の教科書を用いて、新学習指導要領における学習評価の考え方を踏まえた領域別の目標、評価規準の設定、各単元における観点別評価の進め方を考えた。

４　成果

①　新学習指導要領では、「聞くこと」「話すこと［やり取り］」「話すこと［発表］」「読むこと」「書くこと」の４技能５領域のそれぞれにおいて、「知識・技能」「思考・判断・表現」を分けて測る必要がある。観点別評価を踏まえた「読むこと」のテストを作成してみると、どの問題が「知識・技能」を測り、どの問題が「思考・判断・表現」を測る問題かを明確にして作成する難しさを感じた。「知識・技能」と「思考・判断・表現」では双方が重なる部分があるように感じたが、正確さと適切さのどちらに重きを置くのかという出題者のテストの目的の明確化が大切だと分かった。

「知識・技能」は言語材料の使用の正確さに焦点を当てて評価を行い、「思考・判断・表現」は、タスクを与え目的、場面、状況に合わせた内容の適切さに焦点を当てて評価を行う。この観点でこれまで自分の作成してきた「読むこと」のテストを振り返ってみると、教科書の本文をそのまま利用していることが多く、暗記をしていれば解ける問題が多々あり、果たして観点別学習状況の評価の一つである「思考・判断・表現」を正しく測っているのだろうか、と思うことがあった。生徒は定期考査に向けて授業で学習した英文を音読し、言語材料や内容を定着しようと努力してくる。単語や文法を覚えることは英語の技能の土台となるものであり言語学習に不可欠なものである。ただ、「読むこと」の「思考・判断・表現」の力を正しく測るためにはどのようなテストが適切なのだろうか。

「読むこと」を正しく測るためには、特定の言語材料の定着を測るための「知識・理解」の視点と特定の言語材料の使用の有無にこだわらず本文全体の概要や要点、詳細、必要な情報に関しての適切な読みを測る「思考・判断・表現」の視点の２つを意識する必要がある。「知識・技能」では、本文をパラフレーズした文や要約文等を中心に用いながら、教科書で行ってきた言語材料や文法の定着を正確に定着しているかを測ることができる。「思考・判断・表現」において一番大切なことは、特定の言語材料にこだわらず本文全体の概要や要点、詳細、必要な情報に関しての内容の適切な読みを測るこ

とである。それを踏まえると、あらかじめ内容の知っている英文についての内容把握の問題の出題は、正しく「思考・判断・表現」を測っていないと言うことができる。今後は、定期考査においても「思考・判断・表現」の力を正しく測るためには、初見の英文を用いていくことが求められる。ただ、ここには英文を初見で出題することに伴う、どの初見の英文を使えばいいのかという出典の難しさや、持続可能であるかの問題が出てくる。例えば、時系列を扱っている本文であれば関連した類似の英文、ディスコースマーカーに焦点を当てた指導を教科書本文で行ったならばその関連した類似の英文、あるテーマに対して賛成と反対の意見を掴む本文であればその類似の英文というように、教科書本文で使用した内容と似た初見の英文の使用をしていく工夫が必要となってくる。

来年度からは、観点別学習状況の評価を踏まえた「読むこと」のテストにおいて、正確さを見る「知識・技能」と、内容の適切さを測る「思考・判断・表現」の２つの視点が大切であり、今回、「読むこと」のテストを作成することで、「そのテストが適切な力を測っているかどうかの問題の妥当性が必要である」ことを深く認識することができた。

② 来年度採用予定の教科書を用いて、各単元の扱うトピック、言語材料を理解し、単元の評価規準、指導と評価の年間計画を作成した。「論理・表現Ⅰ」においては、主に、「話すこと［やり取り］」「話すこと［発表］」「書くこと」の３領域を中心に評価を行う。それは１回１回の授業で全て実現するものではなく、年間を見通して単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考えていく必要がある。

『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校　外国語】(2021:43)』では、学習評価の進め方について「１単元の目標を作成する→２単元の評価規準を作成する→３「指導と評価の年間計画」を作成する→４授業を行う→５観点ごとに総括する」とある。１回１回の授業ですべての観点を評価するのではなく、年間を通して評価をすることを考えると、「１単元の目標設定を作成する」、その前段階として教科書全体の題材、言語材料の把握を行い、各単元でどのタスクを行っていくか単元に軽重をつける必要がある。

本校では、１年生の時に、学年でレシテーションコンテスト、スピーチコンテストを行っている。これらを「話すこと（発表）」を測るパフォーマンステストの機会とする。「話すこと（やり取り）」は、教科書の題材を用いながらディベート（立論とＱＡのみ）をＡＬＴと共に実施をする。また、書くことについては、定期考査やワークシートで評価を行う。「論理・表現Ⅰ」が標準２単位であることを考えると、当然ながら授業を進めながら軌道修正していく必要もあり、「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」のパフォーマンステストには、MetaMoJi の録音機能も今後積極的に活用していく必要がある。

５　課題

授業の活動とテストで出題する項目は可能な限り一致している必要がある。評価の一つとして用いるテストの妥当性と信頼性を意識することで授業の振り返りや工夫改善につながる。授業内の言語活動（指導）とその目的、それらを測る適切なテスト（評価）となっているかを意識していく必要がある。また、適切な読みを測る「思考・判断・表現」の扱う類似の初見の英文については、今後持続可能な形を模索しながら生徒の「読むこと」の力を正しく測っていく必要があり今後の課題である。

また、「論理・表現Ⅰ」は年間のどこでまとまりごとの評価を行うのかを実際に授業を行いながら軌道修正していく必要がある。「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」を中心に指導と評価の一体化を意識して授業実践し深めていく必要がある。

参考文献

・国立教育政策研究所教育課程研究センター.2021.『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校　外国語】』東京：東洋館出版社.